

六軒長屋

野村胡堂

一

本郷菊坂の六軒長屋——袋路地のいちばん奥の左側に住んでいる、からすばば烏婆アのお六が、その日の朝、無惨な死骸になって発見されたのです。

見付けたのは、人もあろうに、隣に住んでいるだいく大工の金五郎の娘お美乃。親孝行で綺麗で、はきため掃溜に鶴の降りたような清純な感じのするのが、とぶこお幾日か滞った日済しの金——と言っても、さし緡に差し

た鳥目を二本、袂たもとで隠してそつと裏口から覗くと、開けっ放したままの見通しの次の間に、人相のよくない烏婆アが、手拭で縊り殺されて、凄じくも引っくり返っていたのです。

「あッ、大変、——誰か、来て下さい」

お美乃は思わず悲鳴をあげました。確しっかり者と言つても、取つてたつた十八の娘が、不意に鼻の先へ眼を剝いた白髪しらがツ首を突き付けられたのですから、驚いたのも無理はありません。

「何んだえ、お美乃さんじゃないか」

真つ先に応こたえてくれたのは、一間半ばかりの路地へだを距へだてて筋向うに住んでいる、鑄掛屋いかけやの岩吉でした。五十二三の世をも人をも

諦めたような独り者で、これから鑄掛道具を引つ担いで出かけようと言ふところへ、この悲鳴を聴かされたのです。

「鑄掛屋の小父さん、た、大変ですよ」

「何処だい、お美乃さん」

お六婆アの家を表は、まだ嚴重に締っているので、岩吉はお美乃の声がどこから聴えて来たか、ちよつと迷つた様子です。

「お六小母さんが——」

「婆さんがどうしたというんだ」

岩吉はからたちがき枳殻垣と建物の間を狭く抜けて、お六婆アの家の裏口へ

廻つて仰天しました。

「小父さん、どうしましょう」

「何^どうも斯^こうもあるものか、長屋中へ触れてくれ。それから、医者にそう言うんだ」

岩吉はそう言いながら、裏口の柱につかまっつて、ガタガタ顫えて居ります。中へ入つて死骸の始末をすることも、死骸の側を通り抜けて、表戸を開けてやることなども、この中老人^{ちゅうろうじん}は出来そうもありません。

そのうちに、壁隣りにいるお美乃の父親——大工の金五郎も飛んで来ました。二日酔いらしい景気の悪い顔ですが、これはさすがに威勢の良い男で、

「早く介抱してやるが宜い。絞められた位で往生するような婆アじゃあるめエ」

いきなり死骸を抱き起こしましたが、石つころののように冷たくなって、もはや命の余燼よじんも残っていそうもありません。

「こいつはいけねエ」

金五郎は死骸を置いて表戸を開けると、そこには、岩吉の隣りに住んでいる日雇取ひようとりの与八と女房のお石が、叱られた駄々ツ児のような、脅おびえきつた顔を並べて立って居るのでした。

最後に金五郎の隣り——与八夫婦の向うに住んでいる按摩佐のぞの市の母親も出て来ました。眼の見えない佐の市を除けば、これ

で長屋総出になったわけですが、脅えた顔を揃えて、わけの解らぬことを囁き合うだけで、何の足しにもなりません。」

「何にが始まったんだ。大変な騒ぎじゃないか」

木戸の外から声を掛けて、若い男が入って来ました。六軒長屋のすぐ外——表通りに住む雪之助という二十七八の男で、本石町の丸木屋の次男坊に生れながら、商売は嫌いの風流事が好きで、こんなところに別宅を建てて貰い、耳の遠い年寄を一人使って、意気事と雑俳ざっばいとにその日を暮す、雪江ゆきえという筆名ひつめいに相応しい結構な若旦那でした。

「若旦那、大変なことになりましたよ」

与八は齒の根も合わぬ姿でした。

「またお前のところの夫婦喧嘩かい」

事もなげに笑う雪之助。

「そんな事じゃありませんよ。お六婆さんが殺されて死んでいるんで」

「へエ、あの婆さんでも殺されると死ぬのかい」

雪之助はまだ巫山ふざけ戯気分です。

「見て下さいよ。凄い人相ですぜ、若旦那。三途河さんずのかわの婆アだって、

あの顔が行くと驚きますぜ」

大工の金五郎はこんな時にも江戸っ兎らしい剽軽ひょうきんさを失いま

せんでした。

「あれ、父さん、そんな事を」

お美乃はそう言う父親の口へ蓋ふたでもしたい様子です。

「なるほど、そいつは凄かろう。——ところで、届けるところへ届けたのかい」

「面喰っているから、何んにもやりませんよ」

と金五郎。

「それでは後がうるさい。何にを措おいても町役人と、真砂まさご町の親ちやう分に知らせなきやなるまい。お前一と走り頼むぜ」

「へエ——」

日ごろ若旦那の雪之助に物を言い付けられている与八は、こんな時一番先に駈け出すように慣ならされていたのです。

二

「こんなわけだ、——疑えば長屋中皆んな怪しい。怪しくないのは、ゆうべ小石川の叔母のところ泊ったお美乃と、眼の見えない按摩あんまの佐の市だけさ。何処をどう突いて、どう手繰たぐったものか、まるつきり見当が付かない。気の毒だが兄哥あにきの知恵を貸してくれないか、恩に着るつもりだが——」

真砂町の喜三郎は、翌る日の朝早く神田の平次を訪ねて、こう打ち明けて頼むのでした。

平次と同年配で、日ごろ平次の腕や人柄に推服している喜三郎は、十手捕縄の誼よしみを超えて、平次に親みを持っていたのです。

大根畠の小町娘が、白痴はくちの定吉に殺された事件（『人形の誘惑』第二巻参照）が、危く迷宮入りになりかけたとき、平次の助けで厄介な謎を解いたことのある喜三郎。もういちど平次の力を借りて、このお六殺しの不思議な事件を解決しようというのでしよう。

「それ位のことなら、真砂町の兄哥あにきの前だが、蓋も底もあるまい。俺なんか顔を出す幕じゃないように思うが——」

喜三郎の素直な気性を知っている平次は、一応頼まれた位のこ
とでは、容易に御輿みこしをあげて他人の縄張りに足を踏み入れようと
もしません。

「ところが、三輪の万七親分がやって来て、いきなり大工の金五
郎を縛って行ったんだ」

「フーム」

又も憎まれ者の万七が、平次と仲の好い喜三郎への嫌がらせに、
いち早くも下手人をさらって行ったのでしよう。

「それも、大工の金五郎が本当の下手人なら文句はない。俺は指
をくわえて引込んで居ようが、どんな証拠があったにしても、

あの男が人などを殺す筈はない。喧嘩して相手に傷でも付けたというなら解って居るが、六十を越した烏婆アを殺し、臍へそ繰くりを盗んで口を拭ぬぐって居ようなんて、そんなことの出来る金五郎でないことは、この俺が一番よく知って居るんだ。第一親孝行で評判のお美乃が可哀想で見ちゃ居られねエ」

若い喜三郎が、平次の力を借りようとするのは、そんな関係もあつたでしょう。

「三輪の親分が乗り出して、金五郎を縛って行ったのは、いずれ動きのとれない証拠があつてのことだろう」

と平次。

「万七親分に言わせると証拠があり過ぎるんだ。——娘の留守に一杯呑んで寝たという金五郎が、すこしは酔っていたにしても、壁隣りで人間が絞め殺されるのを知らずにいるはずはない。それに金五郎は二年前女房に死なれた時、お六婆アから一両の金を借り、それを返せないばかりに、利に利がつもってひどい目に逢っている。ゆうべ娘のお美乃を小石川の叔母のところへやったのも日済しの払いが溜って、お六に目の玉の飛び出るように催促さいそくを受け、思案に余つての工面だ。娘の留守に自棄酒やけざけを呷あおった金五郎が、夜中にフラフラとお六を殺したくならないものでもあるまい——と、こう万七親分は言うんだ」

「なるほどね」

平次は一応感心するのです。

「それから、もう一つ悪いことに、お六婆アの家の裏口から入るには、金五郎の家の裏口を通るか路地の奥へ突き当って、お六婆アの家と寺のからたちがき枳殻垣の狭い間を通ってグルリと廻らなきやならないが、枳殻垣の下は雪解けで、人間の足跡というのは、けさお美乃に呼ばれて、いかけや鑄掛屋の岩吉があわてて通ったのがあるだけ、あとは野良犬の通った跡もないんだ」

「表は？」

「お六婆アはうんと溜めて居るから、戸締りだけは馬鹿に丁寧だ。」

表の戸はけさ死骸を見付けた時、お勝手口から入った金五郎が、内から輪鍵を外して開けたに違いないと、自分でも言ってるんだから世話アない」

「ところで、金は盗られなかったのかな」
平次はいちばん重要なことに触れました。

「お六婆アの家一文もないところを見ると、下手人は婆アを殺して金を盗ったんだろう。お六婆アが肌身はだみ離さず持っている名代おおさいふの大財布もないし、手文庫には証文だけ。火鉢の引出しの小銭まで無くなっている。恐しく行届いた奴だ」

「お六婆アは本当に金を持っていたんだらうか」

「三十年後家を通して、烏婆からすばばアとか何んとか言われながら、溜め
たんだから、三十両や五十両じゃあるまいと思うが、天井裏も床
下も、糠味ぬかみそ噌かめの瓶の中まで見たがないよ」

「六軒長屋の家捜しは？」

「手ぬかりなくやったが、金を持っているのは、按摩あんまの佐の市だ
け、それも五両か八両だ。あとはお美乃が叔母さんから借りて来
た小銭の外には、百と纏まとまったものを持ってゐる家もないんだ。恐
しく不景気な長屋だぜ」

「なるほど、面白そうだな。——大した役にも立つまいが、とに
かく行って見よう。八、仕度をするんだよ」

平次はいよいよ御輿をあげました。

三

菊坂の六軒長屋は、わけの解らぬ不安に閉とぎされたまま、町役人の監視の下に、お六の葬とむらいの仕度を急いでおりました。

平次はおそろしく用心ぶかい態度で、まず入口の木戸の前に立って、長屋全体と近所との関係を見渡します。

「右手は崖がけ——こいつは鴨越ひよどりごえだ。越して越せないことはあるまいが、藪やぶがひどいから犬が潜っても大きな音がする。まず夜中に忍

び込む工夫はないな」

平次は眼を転じて左を見ました。

「此方は旗本屋敷だよ、銭形の。忍び返しが嚴重に打ってあるから、あの塀は越せまい」

喜三郎は左手を指します。

「すると出入り口は木戸一つだ」

三尺の木戸、古くなった隙間だらけですが、それでも繕つくろいが丁寧ですから、外からは開ける工夫がありません。

「こいつは誰が閉めるんだ」

「木戸の側に住んで居る佐の市の母親の役目になって居るが、あ

の晩おそく帰った鑄掛屋の岩吉が締めたそうだ。亥刻半よっはん（十一時）
近かったというよ」

「朝開けたのは」

と平次。

「佐の市のお袋ふくろが卯刻むつ（六時）前に開けた。輪鍵はちゃんと内側
へ掛けて居たそうだよ。辰刻いつつ時分にお美乃が帰って来て、お六の
死骸を見付けたのは辰刻半いつつはん（九時頃）だろう」

喜三郎は詳くわしく説明しました。



©2017 萩 柚月

「すると、お六を殺したのは、長屋の者に違いないということになるね」

「木戸は内から締って居たし、外に入るところはないから——」

「突き当りのからたちがきの枳殻垣は潜るか越すか出来ないものかな」

「潜るような穴はない。垣の上へ蒲団でも掛けたら、越せないこともあるまいが、向う側はお寺の境内で、しもどけ霜解がひどいから、この五六日人間の入った様子はない」

「あの晩は凍こおらなかつたか」

と平次。

「二三日凍るような天気はなかつた筈だ」

そう言われると、いよいよ下手人は六軒長屋の住人でなければならなくなります。

「親分、木戸を締めたまま、内から乗越せないでしようか」

ガラツ八の八五郎は口を出した。

「やって見るが宜い。請合うけあい乗り潰すから。柱が腐っているし、木戸もボロボロだ。よほど身軽な奴でも、この上に乗ると、大きな音を立てるよ。木戸のすぐ下に寝ている眼の不自由な者や年寄がそれを知らずにいる筈はない」

平次の言う通りでした。按摩あんま佐の市の家はすぐ木戸の側で、夜中に木戸を乗り越す者があれば、たった一と間しかない寝部屋の

窓から枕に響かない筈はなかったのです。

「ともかく、入って見ようか」

喜三郎に誘われて、平次はまず木戸を入れて左側の按摩佐の市の家を覗きました。

「親分さん方、御苦労様で——」

按摩の佐の市はまだ二十四五の若い男ですが、眼が見えないだけに、早くも客の話し声を察して、丁寧に挨拶しました。

「佐の市さんだね。何にか気の付いたことはないかえ」

平次は水を向けます。

「何んにもございませんが——」

「昨夜ゆうべあたり、何にか聴いた筈だと思ふが、お前は勘かんが良いようだから」

「そんなでもございませぬ。眼は見えなくても、若い者はやはり床とこへ入るとすぐ寝付いてしまいます。それでも、親分さんがそう仰しゃると、夜中に眼を覚したとき、路地の中を犬や猫でないものが歩くような気がしました」

「裏口の方でなく、路地の中だね」

「へエー、路地の中に違いございませぬが、それつきり私が眠つたのか、物音が止んだのか、覚えはございませぬ」

「木戸を乗越した音は？」

「それならずぐ解りますが、そんな音は一向聴きません」

「木戸を開けた音がしなかつたかえ」

「だいぶ前から金具が錆び^さびていて、開け立てに齒の浮くような音を立てましたが、二三日こつち不思議にそんな音が聞えなくなりました」

佐の市の答えはハキハキして、思いの外の收穫^{しゅうかく}がありそうです。「有難う、たいそう役に立ったよ。ところで、この長屋中にお六を怨む者もあつたらうな」

「よく思う者はありません。烏金を貸^{から}してひどい取立てをした上、口やかましくて、けちで、大変な人でしたよ」

佐の市も大分悩ませられたらしく、齒に衣きぬを被きせません。

「ずいぶん評判が悪いな」

「本郷中の憎まれ者でしたよ。死んだ者の悪口を言うわけではございませんが」

盲人らしい一国こくさで、佐の市はなおも言い募りそうにするのを、

「お前まア、そんな遠慮のない事を言つて宜いのかえ」

母親のおよのは路地から声を掛けながら入つて来ました。

「構いませんよ。誰も盲目めくらの私が殺したとは思いませんよ」

佐の市はどんなにお六にひどい目に逢わされていたか、こうでも言わなければ、腹の虫が納まらない様子でした。

「よほどお六とは仲が悪かったと見えるな」

平次も苦笑いをする外はありません。

「親分さん方、何時でも伴は斯うですよ。お聴き流しを願います。

——なアに、仲が良いも悪いもありやしません。あのお六さんという人は、ときどき高い利息のつく金でも借りて儲けさしてやらないと、機嫌の悪い人だったんです」

およのは弁解らしく言うのでした。伴の佐の市が働き者で、お六の烏金などを借りるどころの沙汰ではなかったのです。

「ところで木戸を開けたり閉めたりするのは、お前さんの役目だそうだね」

平次はおよ、よ、のに問いかけました。六十を越した一と摺みほどの老婆ですが、なかなか確りしつかものらしく言うことはハキハキして居ります。

「へエー、役目というわけでもありませんが、木戸の側にいるのは私とお向うの与八さん夫婦ですが、与八さんは暢気者のんきですから、ツイ私が締めることになります。それにうっかり締め忘れたりすると、お六さんがやかましかったんです」

お六が木戸を警戒したのも、およ、よ、のが木戸を締める仕事を引受けているのも、持てる者の弱さだったでしょう。

「その晩のことを詳しくくわ話してくれ」

「いかけや鑄掛屋の岩吉さんが、本所の友達の祝事で遅くなるから、木戸は締めずにおいてくれと言いますから、そのままにして寝てしまいました。もっと尤も眠ったわけじゃありません。金五郎親方が酒を買って来たのも、岩吉さんが帰って来て木戸を閉めたのもよく知っております」

「ほか他に誰も入って来た様子はなかったらうな」

「宵のうちのことはわかりません、お勝手に仕事をしていますから。
——いっつはん戌刻半（九時）から先は、金五郎親方と岩吉さんの外には誰も入って来なかった様です」

およのの言葉には疑問を挟むべき余地もありません。

「翌る朝は」

と平次。

「私が木戸を開けました」

「よく閉っていたんだね」

「へエ、棧さんもおりにいましたし、輪鍵も掛っていました」

「輪鍵には釘を差さないのか」

「差したり、差さなかったりですよ」

「その時は？」

「釘は差してなかったようです。そう言えば二三日前から釘が見えなくなつて、輪鍵を掛けただけですよ」

およのは妙な事に思い当った様子です。が、平次がどうしてもんな細かいことまで聴くのか、見当もつかなかったのです。

「お六の家へ行って見ようか、銭形の兄哥」

喜三郎は少し面倒臭そうでした。

「いや、少し待ってくれ」

平次は木戸へ引返すと、もういちど念入りに調べ始めました。

棧の具合、板の割目、それから木戸を吊つった蝶番ちようつがいの具合など。

「おや？」

平次は木戸の滑らかさが、蝶番に油を注してある為ためだとわかると、鼻を持って行って、クンクンと嗅いだりしました。

「親分、何んか匂うんですか」

とガラツ八。

「お前の良い鼻で、こいつを嗅いで見てくれ。ただの燈ともし油じやあるめえ」

「良い匂いですね、親分」

「その匂いを覚えておくんだ。——あッ、人が来る、鼻を引込めろ、八」

四

「与八、ちよいと待った」

「へエ、これは真砂町の親分さん」

ひょうとり

日雇取の与八は、急に立止まって、ヒョイとお辞儀をしました。

喜三郎に声を掛けられなかつたらそのまま知らん顔をして行くつもり心算だつたでしょう。

「何処へ行くんだ」

「ちよいと、その」

「ちよいとその、何処だ」

「へエー」

「へエじゃないよ、うさんな野郎だ。来いッ」

喜三郎にピタリと腕首を掴まれると、与八は一ぺんに悲鳴を挙げてしまいました。

「言いますよ、言つて了しまいますよ。親分、勘弁して下さい。あつしのせいじゃありませんよ。二輪の親分が、誰にも言わずに、そつと持つて来れば、褒美をやると言つたんで」

三十七八——無精髻ひげに顔半分を包んだような、洗いざらしの半纏てん一枚の与八は、何も彼もベラベラとしゃべつてしまひそうです。

「何を持つて行くんだ。出して見ろ」

「これですよ、親分。——金五郎親方の裏の、崖がけの藪やぶの中から拾つたんで」

与八は腹掛の井から、古風な縞しまの財布さいふを一つ出して見せました。「それが何うしたんだ」

「お六の財布ですよ。こいつを首にかけて、婆アの癖に、ジャラジャラさせて歩いたことは、本郷中で知らない者はありません」

「何？」

事の重大さに、喜三郎も平次も緊張しました。取上げて見ると、中は空っぽですが、ひどく真つ黒な泥の付いたのを、無理に擦すつて取った様子がありありと見えます。

「金五郎親方の裏口の藪に引つ掛つていたんです。——きのう一

日誰にも見付けられないのが不思議なくらいでしたよ」

与八はすっかり観念しました。

「今ごろそんな細工をするようじゃ、油断がならない。——大急ぎで片付けよう」

平次は喜三郎を促うながします。

「財布は？」

喜三郎は念を押しました。

「勝手にさせるがよかろう。金五郎が下手人だとしても、自分の

家の裏口へ空財布を捨てるか捨てないか、万七兄あにき哥にも判らない

ことはあるまい。そいつは与八の手柄にさしてやるが宜い。藪に

引掛つていた財布に、真黒な泥がどうして着いたか、それが判りさえすれば宜いよ」

平次にそう言われると、こんな財布にこだわるのが馬鹿馬鹿しくなります。

与八の家は空っぽ。左側の金五郎の家を覗くと、娘のお美乃が一人、壁の方を向いて、何をすることもなく坐っております。

「お美乃」

喜三郎が声を掛けると、娘は僅かにこちらを振向いて目礼しました。

貧^まし気な様子の中に、たった一人取り残された十八になるお美

乃は哀れ深くも美しい姿です。

「銭形の親分が少し訊きたいことがあるそうだ。話してくれ」

「ハイ」

お美乃は上りかまち框に手を突くように、泣き腫はらした眼で平次と喜三郎を迎えるのでした。

「親分、可哀想じゃありませんか、何んとかしてやって下さいよ」
八五郎は平次の耳許にささやきます。

「ところで、お六から借りた金のことだが、——いつ借りて、どんな催促さいそくをされて、いくら払って、残っているのはいくらだ」

平次はそんな細かい事を訊きながら、上りかまち框に腰をおろしてし

まいりました。

「二年前、母さんが死んだとき、一両だけ借りました。三月日に一両二分にして返す約束で——」

「恐ろしく高い利息だな」

「でも払えないとなると、毎日毎日ここへ来て、いやな事ばかり言いました。父さんは一生懸命働いて利息だけは入れた心算ですが、それでも、二年目の今となつては、積り積つて三両になつたから、私を奉公に出すか、でなかったら、日済しにして返せと言われて、私は小石川の叔母さんのところへあの晩相談に行ったんです」

ボロボロとこぼれる涙を、粗末な袷の袖で拭いて、おほつか覚束なくもお美乃はつづけるのです。

「太え婆アじゃありませんか、親分」

後ろの方で、ガラツ八は一人で腹を立てています。

「その婆アは殺されているんだ。黙って居ろ」

「へエ——」

「ところで、親方は酒が好きかえ」

平次は変なことを訊きました。

「ハイ」

それで苦勞をしているらしいお美乃は、極り悪そうにうつむ俯向くの

です。

「酔うと機嫌の悪くない方かい」

「いえ、そんな事はありません——どつちかと言うとよく眠る方です」

お美乃の敢然と振り仰ぐ顔。——浅黒い細面の品のよさは、身み扮なりも背景も超越して、なにか冒おかし難い美しさが輝くのでした。

「仕事の方は？」

「父さんはいつも仕事を自慢ばかりして居ます」

腕に覚えのある良い職人が、酒と狷介けんかいに煩わずらわされて、初老を過ぎて貧乏から脱けきれないみじめさは、平次にもよく解るような

気がしました。

六畳の間に据えた仏壇には、先祖の位牌と、死んだ女房の新しいかみよう戒名が飾られてあるらしく、貧しいうちにも、何にか折目の正しさが、人に迫るものがあるのです。

「親分さん方」

後ろから声を掛けた者があります。

五

「丸木屋の雪之助さんだよ」

喜三郎は平次に引合せました。それは二十七八の若旦那型の華奢な男で、色の白さも、眼の涼しさも、唇の紅さも、——そして言葉の爽かさも、申分のない男でした。

「銭形の親分、お美乃さんが可哀想だ。一日も早く金五郎親方を助けてやって下さい。あの人は気性の激しい人には違くないが、曲ったことや間違ったことをする人じゃありませんよ。——こればかりは三輪の万七親分の鑑定めきき違いでしょう」

静かですが、反抗を許さない調子で、シトシトと弁解して行く雪之助の言葉を、平次は一句毎にうなずきながら聴きました。

「大きにそうだろう。私もそう思つて居るが、困つたことに親方

のためにならない証拠ばかりだ」

「例えば？」

「お六の財布が、けさ此家の裏口の藪の中に落ちていたそうだ」
「まア」

お美乃の方が蒼くなりました。

「そいつは証拠じゃありませんよ。金五郎親方が盗ったものなら、自分の家の裏口へ空財布を捨てるものですか」

雪之助は躍起やっきとなつて弁解しました。

「そうかも知れない、そうでないのかも知れない」

平次は自分に言い聴かせるように、こう深々とした調子で言う

のでした。金五郎の向う側は、いかけや 鑄掛屋の岩吉の家でした。行つて見ると、これはすつかり脅おびえて了しまつて、昨日から稼業も休み、何をすることもなく、唯ワクワクと暮している様子です。

「岩吉というんだね」

「へエ——」

ガラツ八にきめ付けられて、岩吉はガタガタ顫え出しました。岡っ引が三人、狭い門口を塞ふさぐなんて想像もしたこともない恐しい凶です。

「お前も、お六には借りがあるんだろう」

平次は静かな調子ですが突っ込んだことを訊きました。

「ありましたたが、払いましたよ。へエ」

「何時、いくら借りたんだ」

「一両二分、三年前に借りましたが、今年になつてから皆んな返しました。——こ、この通り、証文を返して貰いましたよ」

岩吉は大きな財布の中から、真新しくさえ見える自分の証文を出して見せるのでした。

「金は何時返したんだ」

「二三日、いえ、一と月ほど前でした」

「利息が高いから、うんと金高が嵩かさんだらう」

と平次。

「へエ——」

「その金を何処から手に入れて返したんだ」

「友達が古い貸しを返してくれましたよ、へエ」

「何処の何んという友達だ」

「へエ」

「言えまい」

「へ——」

「八、その野郎を縛つて了え」

平次の命令は激しくて唐突とうとつでした。

「あッ、お許しを願います。——お願い、どうぞ、御勘弁を——」

岩吉は這い廻りました。生活難に疲れきつて、見る影もなく萎しなびて居りますが、何処かこの鑄掛屋には、伶俐りこうなところが残って居ります。

「さア、早く言つて了え。言わなきや、お六殺しの下手人にされるぞッ」

「と、飛んでもない親分さん。私はあの家の手箱の中から、私の証文を一枚抜いて来ただけですよ」

岩吉は到頭白状してしまいました。

「何とつまらない細工をするんだ」

と平次。

「でも、利息を払っても、元金は減りません。一両二分借りて、この三年の間に三両以上も絞られました。——お六が死んだ今となつては、手箱から証文をそつと持って来ても、大した罪じゃあるまいと——」

「馬鹿ッ」

「へエー」

「余計な事をするから物事がこんがらかるじゃないか」

「へエー」

「その証文をもとの手箱へ返せ——と言うところだが、今度だけは許してやる。その代り何んでも言うのだぞ」

「へエ、どんな、どんな、事でも申します」

岩吉は平次の前に米搗こめつきバツタのようなお辞儀をしました。

「お六といちばん仲の悪かったのは誰だ」

「佐の市でございます」

「その次は？」

「金五郎親方でしょうか」

「一番仲のよかったのは？」

「お六は仲の良い人間を拵こえると、損が行くと思つて居ましたよ」

「その中でも唾いがみ合わないのがあるだろう」

「若旦那——雪之助さんくらいのものでしようよ。男がよくて物

柔かですから、お六婆さんだつて、あんな解つた人と話しているのは、満更悪い心持じゃなかつたでしょう」

「お前は」

「良いような悪いような、ヘツ、ヘツ」

一向要領を得ませんが、それでも平次は必要な程度の顎は取つた様子です。

六

お六の家には、町役人と雪之助と与八の女房が詰めて、葬とむらいの

仕度をしておりました。平次はここに腰を据^すえて調べるのかと思
うと、勝手口の表戸の締りだけ見て、至って簡単にきりあげ、最
後に路地の突き当りの枳殻垣越^{からたちがき}しに、寺の境内の様子を眺めまし
た。

「ひどい雪解けだね。二三日垣の側へ人間が歩いて来た様子はな
い——おや、この境内の土は真っ黒じゃないか」

独り言のように言っつて、平次はスタスタと菊坂の通りへ出るの
です。

「親分、帰るんですか」

八五郎はあわてて追い付きました。

「そうだよ、もうあの長屋には調べることはない」

「下手人は？」

「解つった心算だ。——お前つ気の毒だが今日一日身体を貸してくれ」

「へエ、何をやらかしゃ宜いんで」

「耳を借せ」

「へエー」

何やら言い付けて、八五郎を飛ばしてやると、平次は改めて喜
三郎のけげんな顔を迎えました。

「真砂町の兄哥、今日陽の暮れる前に、此処へ皆んな集めてくれ
まいか」

「皆んなというと？」

「三輪の万七兄哥も、縛られた金五郎も一緒だ」

「それはわけはないが」

「その前に、番所へ行つて金五郎に逢つて、お六の表の戸の締りのことを聴いて貰いたい。——棧がおりていたか、輪鍵だけだったか、輪鍵に釘が差し込んであつたか」

「そんな事ならわけはない、兄哥は？」

「俺は雪之助さんの家へ寄つて、良いお茶を一杯貰つて飲んで、真つすぐに帰るよ。それじゃ頼むぜ」

「合点」

三人は三方に別れました。それは、ポカポカ暖かい日の昼少し前のことでした。

その日の夕刻、酉刻^{むつ}少し前、六軒長屋の路地の中に、関係者が全部集まりました。脹^{ふく}れ返った三輪の万七、萎^{しお}れきつている大工の金五郎、大はしゃぎのガラツ八、それにつま[、]ま[、]れ[、]た[、]よ[、]う[、]な[、]喜[、]三[、]郎、岩吉、与八夫婦、佐の市とその母親、美しいお美乃、そして長屋の外に住む雪之助が物好きに此^{この}一団に飛び込んで、進行係のような役目を勤めていたのです。

「下手人は金五郎じゃないと言うのかい」

万七は小意地の悪い調子で平次に突っかかりました。路地の中

にも夕映えが残って、妙に神秘的な気持のする刻限です。

「三輪の兄哥、気の毒だが下手人は金五郎じゃないよ。金五郎なら、翌る日わざわざ空財布を自分の家の裏口へ捨てておく筈はない。——それに、金五郎が本当にお六を殺したなら、表戸位は開けて置くだろうよ。裏口だけ開けて置くと、自分が下手人だという証拠を残して置くようなものだ」

「——」
万七は黙ってしまいました。

「下手人は岩吉でもない。——岩吉は臆病おくびよう過ぎるし、お六を殺した覚えがあるなら、手文庫から自分の入れた証文だけを抜いて行

く筈はない」

平次はつづけました。

「与八は？」

と喜三郎。

「これも正直者だ。働くのが面白い男だ。人の金に目などを付ける男じゃない」

「佐の市は盲目めくらだ。——あとは女ばかり」

こんどは喜三郎が言うのです。

「その通りだ」

と平次。

「すると下手人は誰だ？」

万七は少し威猛高になりました。

「外から入って来たのさ。——長屋の衆じゃない、長屋の衆はみな貧乏だが働き者だ」

「そんな馬鹿な事が、——お六の家の表の戸は内から締って居るんだぜ。——その上木戸も輪鍵が掛っていた筈だ」

万七は抗議しました。

「下手人は宵のうちから前の空屋に忍んでいて、時分を見計らつてお六の家へ入ったんだろう。多分金五郎が酒を買いに出たとき、——岩吉が帰る少し前だ。お六は知っている顔だから用心もしな

かった。それを見込んで、不意に後ろから絞め殺した上、有金を盗って、わざと勝手口を開けて、表からそつと出た」

「表は締っていたぜ」

万七は我慢のならぬ声を出しました。

「紐ひも一本で、外から締められるのさ。皆んな中へ入って見るが宜い、俺は外から輪鍵をかけるから」

平次はお六の家の戸の輪鍵の輪に、水で濡らした長い紐の端っこを絡からむと、その一端を戸の隙間から潜くぐりして表へ出し、自分は一尺ほど開けたところから外へ出て、戸を締めた上、静かに紐を引きました。紐は平次の手にたぐられると、その末端を濡ぬらして絡

んだ輪鍵が、受うけの金具の上にカタリとはまりました。と見ると、絡んだ紐は独りでスルスルと輪がほぐれて、平次の手に納まるのです。

「あッ」

と驚き騒ぐ人々。

「木戸を外から締めたのもこれと同じことだ。佐の市が夜中に聴いた物音は、曲者が木戸から逃げ出す音だったんだ。見るが宜い」
平次は木戸のところまで人々を誘さそうと、同じ方法で外から輪鍵を掛けて見せました。

「輪鍵が掛って、釘の差していなかったのは、外から細工をした

証拠だ。お六の家の表戸も、釘が差していなかった。これは金五郎がよく知っている。うんと溜め込んで、用心ぶかくなりきって居るお六が、そんな戸締りをする筈はない」

「——」
皆んなしばらく黙ってしまいます。

「木戸の輪鍵の釘が近頃見えないのもそのためだ。下手人は二三日前にその釘を隠してしまったのだ」

「その下手人は誰だ」

三輪の万七も、さすがに兜かぶとを脱ぎました。

「仕事の嫌いな奴だ。——金が欲しくてたまらない奴だ。——金

五郎や岩吉は、貧乏こそしているが仕事は自慢だ。人を殺して金を盗ることなどは、夢にも考えたことがあるまい。ところが、世の中には、ノラリ、クラリと遊んで暮して、贅沢したいばかりに、金を欲しがっている人間がある」

「誰だ、そいつは、銭形の」

喜三郎は四方あたりを睨め廻しました。

「木戸ちようつがいの蝶番に油を注さして、開閉あけたてに音の出ないようにした奴だ。

——その油は、日本橋の通三丁目だてで売っている、伊達者だての使う伽きや羅油らゆだ。八、ここにいる人間の頭を嗅いで見ろ」

「あッ」

あわてて逃げ出した一人は、早くも八五郎と喜三郎に引戻されました。

「御用ツ」

叩き伏せて、キリキリと縛ると、それは何んと、一番無害らしく見えた、丸木屋の次男で、意気事と雑俳ざつばいに浮身をやつしている、若旦那の雪之助ではありませんか。

盗んだ金は三百両余り、寺の燈籠とうろうの中から平次が見付けました。

その晩、お六の金をさらった雪之助は自分の家へ持込むのが不用心と思ったので一と先まずから積か殻か垣がき越しに、財布を隣の寺の境内に投げ込み、翌る日の朝行つて始末をし、金は燈籠に、財布は金五郎

の家の裏に捨てたのです。

「驚いたね、親分。雪之助が何んだってあんな気になったんでしょう」

ガラツ八がこんな事を訊いたのは、ズツと後のことでした。

「ブラブラ遊んでいるから、無暗に金が欲しかったのさ。贅沢をするより外に能のうのない人間ほど恐いものはないよ。——お前に雪之助の身持と、日本橋の店でも愛想を尽かしていることを訊出させたのは、そのためさ」

「万七親分が乗出したのは」

「あれは雪之助の細工だ。三輪の兄哥はそう言わないが、あんま

り早く手が廻り過ぎて変だと思つたよ。それから金五郎の裏口へ財布を捨てたりして、金五郎を無実の罪に追い込み、あとで頼たよりないお美乃をどうかしようという企たくらみだったのさ。——俺が金五郎の家の裏に財布が捨ててあつたというと、雪之助は空財布からさいふと言い直したろう。——あれは語るに落ちたのだよ」

「悪い野郎ですね」

「申分のない悪党だよ。——ところで、真砂町の喜三郎兄しゆう哥の祝しゆう言げんまではかまに、お前も袴はかまと羽織はねくらいは拵はかえて置おいちゃどうだ」

「そこまでは届ときませんよ、親分」

「折角せつかくお美乃が嫁入よめいりするんだぜ、その扮なりで高砂やアでもあるめ

エ。——これで間に合わなきや、また何んとかするぜ」

平次はそう言いながら、珍しく脹ふくらんだ財布を八五郎の膝小僧の上にとつと載のせてやるのでした。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

六軒長屋

初出―「オール讀物」昭和十六年四月号 文藝春秋社

底本——「錢形平次捕物全集」第六卷
河出書房 昭和三十一年七
月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>